

医療過疎

かしま 島・へぎ地支える

2007年7月。南大隅町は、未明から時間100ミ超の大雨に見舞われていた。早朝、同町役場から旧佐多町の中心地・佐多伊座敷へ向かう国道269号で、大規模な土石流が発生、交通は寸断された。

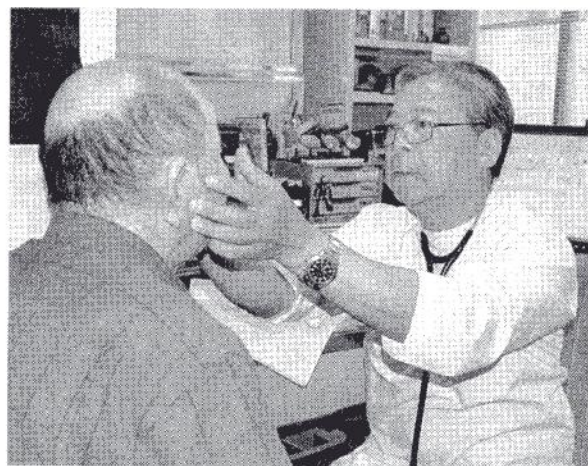
③

「患者が待っている。船を出してほしい」。雨脚が弱まった同日昼すぎ、佐多伊座敷にある今隈医院の今隈満院長(60)は、役場の災害対策本部に直談判していた。

同医院は、地域で唯一の診療所。今隈院長は役場近くの自宅から毎日車で20分ほどかけて通っており、道路寸断で診療ができなくなっていた。役場は要望を受け入れ、漁船をチャーター。今隈院長は小雨のなか役場近くの港から乗り込み、漂流物避けながら約40分かけて、午後3時ごろ、医院のある伊座敷の港に到着した。

「診察を始めます」。防災無線で開院を知らせると、すぐに15人ほどが訪れた。住民は医師を必要

病院長から開業



高齢者の日常生活を聞きながら診察する今隈満医師(右)
＝2月上旬、南大隅町佐多伊座敷

としていると実感。一方、地域の医師はいなくなっで、地域に対する医療への責任を強くした。

窮状を見かねたのが、肝属郡医師会立病院(錦江町)の院長だった今隈医師。過疎が進む地域で

の開業は、患者数や収入に不安があり、迷いがなかったわけではない。「人は少なくても、医師は必ず必要。ほかに来そうな医師はいないし、開業しようと思っていた自分のために開けた道」。13年間務めた病院院長を後進に譲り、同年12月開業した。

人口3千人余りの旧佐多町に、現在、医師は2人だ。

今年2月10日朝。同医院の待合室では、高齢者ら数人が診察を待っていた。高血圧や糖尿病など慢性疾患がある患者がほとんど。「ご飯はおいしい?」「歩いてる?」。今隈医師は診察しながら生活習慣を聞き、一人一人に運動や食事についてアドバイスする。その後も新型インフルエンザのワクチン接種や在宅診療に追われた。

1月下旬。辺塚集落の男性が自宅で転倒した。辺塚診療所で診察中だった今隈医師が駆けつけ、救急車や病院を手配した。診療所に通う中村知子さん(72)は「週に1回でも、集落の人はみんな助かっている」と話す。

開業して4年が過ぎた。今隈医師は神経内科が専門だが、診療科が細かくある病院と異なり、目や皮膚疾患を診察するのはいつものことだ。患者から教わることは多く、毎日が勉強。「在宅でみとり、家族が満足したときが、開業してよかったと思う瞬間。周りは難儀をして、と言うが、今は医師として幸せ」と力を込めた。

無医解消、地域に安心

近頃の木佐貫良美さん(84)は通院する一人。開院以前は、バスで1時間ほどかけ、医師会立病院へ通っていた。「先生が来てくれて、今は何かあったときも安心」

今隈医師は、医院からさらに30分ほど離れた「辺塚」の診療所でも、毎週木曜日に診察する。辺塚から佐多伊座敷へ向かうバスは週2便。診療所